

12. 加藤清正の実像

加藤清正は、肥後という地方の一大名で、49歳という若さで死去したにも関わらず、100年以上経って突如忠義の武士の代表のような存在になり、最後には神に祭り上げられたちょっと変わった武将です。

清正は、「猛将」とか「豊臣恩顧の大名」とか形容されますが、清正の経歴を詳細にみていくと、異なった実像が見えてきます。以下、清正の実像に迫りたいと思います。

1. 清正について語られていることの検証

(1) 清正は大男だった！？

先ず、身長ですが、海音寺潮五郎の小説「加藤清正」など清正を描いた多くの物語では、180cmを超える大男として描かれていることが多いですが、現存する武具や肖像画から推定すると、160cm前後とされています。戦国武将で180cmを超える大男としては、藤堂高虎、立花宗茂がいますが、彼らは若い時から合戦に明け暮れた武将であり、武功によって大名にまで上り詰めています。藤堂高虎など、体のあちこちに刀や鎧、鉄砲傷があったと言います。それに対して清正は、国内の合戦では、秀吉に近侍し、情報収集・使者・兵站・普請などを行い、ほとんど前線に出ていないと思われます。個人として武功が残るのは、賤ヶ岳での鎧働きと天草国人一揆での木山弾正との一騎打ちくらいです。また、大将としての合戦経験は、肥後半国の大名に就任して直ぐの天草国人一揆のみです。いずれも華々しいものではありません。清正は、武将向きの体格でなく、秀吉からは、戦働きは期待されていなかったと思われます。従って、この点からも、清正の身長は160cmくらいだったという説が当たっていると思われます。

清正は、その後朝鮮での戦いで、猛将の評判がたったことから、小柄な体格を大きく見せるために、身長が高く見えるよう長い烏帽子形兜をかぶり、体高六尺三寸ある帝釈栗毛の馬を愛用し、顔に髭を蓄えていたと思われます。これらがなければ、利発そうな優しい顔の小柄な武将だったと思われます。

(2) 清正は猛将だった！？

①国内での清正は猛将とは言えず

本来清正は、小柄で、合戦向きではなかったことから、初めから合戦要員ではなく、猛将になる下地はなかったと思われます。清正は、兵站・普請・直轄地の代官・上使などを経験し、26歳で肥後半国の大名に取り立てられました。肥後半国の大名に取り立てられたのは、前の肥後1国の大名佐々成正が肥後の実情を把握しないまま検地を急ぎ、国人の反乱を招いたからです。この反乱の調査・監視のため、清正は、秀吉の上使の1人として肥後に着任しています。清正らの報告により、佐々は切腹となり、反乱を起こした国人とその一族は処刑されています。このように清正は、秀吉の配下で肥後の実情をもっともよく知る者の一人であったことから、肥後半国の大名に抜擢されたと思われます。しかし問題は、清正はそれまで大きな部隊を率いた合戦を経験していなかったことです。肥後半国の大名になった直

後に、残り半国の小西の領土で天草国人一揆が発生します。清正も小西の応援要請に基づき出陣することになりますが、これが大将として経験する最初の合戦でした。清正は、前の肥後藩主佐々成正が肥後国人一揆の鎮圧に手間取り、切腹させられた経緯を良く知っていましたから、早く鎮圧しないと佐々と同じ目に合うと考え、嘘の講和情報を流して敵を油断させるなどなり振り構ない戦いをしています。清正が長く自慢していたと言われる木山弾正との決闘についても、清正記には、弾正が弓を構えたところ、清正は持っていた鎧を投げ捨て、「飛び道具とは卑怯なり。太刀で勝負せよ」と叫び、それに応じて弾正が弓を投げ捨てたところで、清正は直ぐに鎧を拾い、弾正を突き刺した、と書かれています。真偽は分かりませんが、清正に余裕がなかったのは確かです。

このように、国内での清正は、とても猛将と言えるような武将ではありませんでした。

②猛将の評判は朝鮮で？

猛将と言われるようになったのは、朝鮮の役での朝鮮での評判からだと思われます。

しかし、朝鮮での個々の戦いを見ていくと、猛将と呼ぶにふさわしい戦いは見られません。

朝鮮では、出だしから小西の後塵を拝しますし、清正の武功とされる臨津江の戦いも、朝鮮侵攻当初朝鮮軍が敗走している中での戦いであり、そんなに華々しい勝利とは言えません。支配を割当てられた咸鏡道でも、朝鮮 2 王子の確保、オランカイ侵入までは良かったのですが、そこからは義勇軍の反撃に会い、敗走の日々です。そして、三成ら朝鮮奉行の命令により漢城に撤退することになりますが、その時点での清正軍は、陣立て時の 1 万 2 千人から 7 千 2 百人まで減少していましたから、実質的には負け戦が続いていたと思われます。清正隊に組み入れられた鍋島直茂は、三成ら漢城の朝鮮奉行に使者を送り、咸鏡道の状況を報告しています。それに対して奉行の増田長盛と大谷吉継は、その使者に直茂宛の「清正に加担しないように」との内容の書面を託していますから、直茂は、清正の合戦遂行能力に疑問を持っていた節があります。その後清正は、第 2 次晋州城の戦いで、黒田長政と共に先鋒を務め、晋州城の石垣を破壊して城内に突入するという武功を挙げていますが、籠城者約 3 千人に対し、包囲した日本軍約 9 万人の戦いです。清正の最も有名な戦いは、厳しい寒さ、食料や水が枯渇している中で、約 5 万 7 千人の明・朝鮮連合軍に包囲されながら、2 週間に及ぶ籠城戦を戦い抜いた第 1 次蔚山城籠城戦です。その 9 か月後に同じ蔚山城で明・朝鮮連合軍約 5 万人に包囲・攻撃されながら、約 2 週間籠城し敵を撃退した第 2 次蔚山城の戦いも見事なものですが、いずれも籠城戦です。清正は、合戦経験が少なく、立花宗茂や島津義弘の釣り野伏せのような高等戦術は使えなかったようです。また、咸鏡道で敗走を続けたように、義兵によるゲリラ戦への対応も不得手だったように思われます。得意だったのは、築城経験に基づき城を知り尽くした籠城戦だったようです。従って、合戦に強いという言葉での猛将という言葉は、躰躰館の戦いや蔚山城救援戦などでの立花宗茂や洒川の戦いで約 7 千人の兵で約 5 万人の明・朝鮮軍を破った島津義弘がふさわしく、清正にはふさわしくないように思われます。

清正に対する猛将という評判は、合戦の強さを言ったものではなく、清正が朝鮮 2 王子

を人質にしたこと、および和議交渉での真正面からの交渉姿勢に対して、朝鮮側から出たものではないでしょうか。

清正が文禄1年(1592年)7月に咸鏡道の会寧で朝鮮の2王子を人質にしたことは、日本人の感覚以上に朝鮮の人たちに憎しみと恐怖を与えたようです。日本の戦国時代であれば、戦国武将の息子が捕らえられても見捨てられる可能性が高いですが、朝鮮は儒教国家であり、君主を頂点とした身分秩序が確立し、国王に対する忠義の精神が根付いていましたから、朝鮮国のNo2である王子を人質にした清正は、朝鮮の国民全員から憎悪の対象とされたようです。これが朝鮮で清正が鬼上官と言われ、猛将と言われるようになった最大の原因と思われる。

また、清正と朝鮮側松雲大師惟政との交渉における清正の態度も、猛将の評価につながったのではないかと思います。

明軍が平城に攻め入った後、明・日本間で和議の交渉が行われますが、明・沈惟敬、日本・小西行長の交渉は、小西の一方的な譲歩で進みますが、その途中から始まった朝鮮・松雲大師惟政と清正との交渉は、秀吉が提示した和議7条件を巡る真正面からの交渉になります。この7条件について、松雲大師は、「盗人猛々しい」と反駁を加え、清正は「ならば朝鮮を亡ぼすのみ」と一歩も譲りません。ここら辺のやり取りは、一国を代表する者同士の迫力あるやり取りとなっています。この交渉に途中で参加した明の將軍は、「秀吉に代えて清正を日本の国王に封じる」からと清正を調略してきますが、清正は一顧だにしません。この姿勢も清正の評価を一層高めたように思われます。

この交渉を知った小西は、沈惟敬との交渉を急ぎ、偽の秀吉の降伏状を明に提出し、明の皇帝が秀吉を日本の国王に封じる誥勅を引き出し、残りは曖昧にして、明の冊封使が大坂に向かうこととなります。冊封使が釜山に到着した後も、清正は、小西らの和議に反対し、朝鮮に駐屯する姿勢をとります。冊封使が日本に向かう条件として、日本軍の朝鮮からの撤退があり、冊封使が清正の駐屯姿勢を問題にし、日本に行かないと言い出したため、小西と石田三成は、秀吉と相談し、表向き清正のいくつかの失策を理由として、秀吉から清正へ召還命令を出させます。その結果、明の冊封使が大坂城を訪れ、秀吉を日本の国王に封じる旨の誥勅を読み上げるのですが、その翌日の饗宴の席で冊封使が「日本が朝鮮から全面撤退しない限り、交易は始められない」と話したことから、秀吉が激怒し、和議は破断となります。秀吉は、明との和議と朝鮮との和議を別々に考えていたようで、明との和議では恥を忍んで冊封を受けるが、朝鮮との和議は、当事者で交渉して決めるものであり、日本は朝鮮の領土を一部実効支配していることが考慮されるものと考えていたようです。

翌年1月から慶長の役が始まりますが、ここからは、清正を中心に明・朝鮮と交渉するよう命じています。それを受けて清正は、松雲大師と交渉を再開しますが、お互いに妥協の余地がなく、戦いを続けることとなります。しかし、慶長3年(1598年)8月に秀吉が死去し、日本軍は撤退することになります。明が朝鮮支援に乗り出し、日本軍が押しまわられている中では、現実的には三成・小西案で和議を結ぶしかなかったと思われるのですが、落とし

どころを探る交渉の過程で、一国を代表して交渉する者の態度としては、誰が見ても清正の方が素晴らしい態度です。明・朝鮮側は、このような清正の態度をもって猛将と評価したのではないのでしょうか。

(3) 清正は豊臣恩顧の大名だった！？

清正は、豊臣恩顧の大名の代表のように言われます。豊臣恩顧の大名という言葉の最も忠実な意味は、「秀吉に引き立てられた恩義を持ち、終生豊臣家を守り通そうとした大名」ということができます。この意味では、清正は豊臣恩顧の大名ではありません。

秀吉に引き立てられたことは事実であり、その恩を深く感じていたのも事実です。しかし清正は、秀吉死去後帰国すると、その翌年には、家康の養女、それも家康の実母の弟の娘を継室として、家康との関係強化を図っています。この年、清正を含む七将が石田三成暗殺を謀った七将襲撃事件が起こりますが、七将のうち清正のほか福島正則、蜂須賀家政、黒田長政が家康と姻戚関係を結んでいることから、七将は、次の天下人を家康と見定め、家康への接近を図ったと思われます。この時点で清正は、豊臣家のために秀頼を天下人にしようという気持ちは全くなかったと思われます。清正は、信長亡き後、秀吉が信長の遺児に天下を渡さず、自が奪い取った経緯を見て来ています。また、朝鮮から帰って間もない清正は、明・朝鮮軍の日本侵攻があると考えていましたので、その場合に大將が務まるのは、家康しか考えられなかったと思われます。それでも清正は、秀吉から肥後半国の大名に取り立てられた恩義を深く感じ、家康が天下人になった後、豊臣家が名誉ある地位に就けるようにしたいとずっと考えていたと思われます。例えばそれは、豊臣秀長が有した大和郡山・紀伊120万石、織田信雄が有した尾張・伊勢100万石余などの領主などが考えられます。

関ヶ原の戦い後の論功行賞において、東軍に味方した豊臣恩顧の大名は、秀吉から与えられた領土から大幅に加増された新しい領土に移されるか、留まる場合でも秀吉から与えられた領土を上回る加増を受け、領土面から言えば、徳川恩顧の大名へと変わりました。即ち、ここで、現恩から考えれば豊臣恩顧の大名は消滅したと言ってよいと思われます。以後豊臣恩顧の感情を持ち続けたのは、関ヶ原の戦いで西軍に味方し、改易になり牢人となった豊臣恩顧の旧大名および家臣のみです。これは大坂の役を見れば明らかです。

清正も、小西の宇土城攻めの功績で、肥後半国19万5千石から肥後1国54万石に加増されます。これだけの加増があっても、なお清正は、徳川家より豊臣家に忠義を尽くそうと考えていたと考えるのは困難です。それでも清正は、江戸参勤の行き帰りに大坂城に伺候し、秀吉の遺児秀頼の成長を見守っています。これは、朝鮮から帰国後清正が熱中した儒教の教え（六尺之孤）のせいかも知れません。家康の謀臣本多正信から、「大坂城へ寄られるのは、徳川より豊臣に忠義があると誤解されるから、止められよ」と忠告されても、「今があるのは徳川家の御恩のおかげであることは承知しているが、若いとき豊臣家から賜った御恩を忘れるのは武士の姿勢ではないと考える」と言って、大坂城伺候を止めませんでした。これは、長くから徳川に仕える譜代大名で固める家康にとっても理解できる態度であり、家康の信頼を深めることとなります。

このような清正は、なお豊臣恩顧の大名の動向を危惧する家康にとって心配な存在でもありました。それは、清正に人望があったからです。清正の行動を見ると、自分より地位が上の人や先輩は立て、同輩とは対等に接し、後輩は良き先輩として面倒を見ており、皆に好かれる存在でした。当時の主要なメンバーを見ると、福島正則は、素行の悪い嫌われ者、細川忠興は、家柄が良く文武両道に通じた才人でしたが親近感がなく、黒田長政は、若くして武功や調略に長けていたのですが、父の如水が「もう多くのことでお前にはかなわないが、まだ俺がお前に勝っていることがある。それは、俺が死ねば多くの家臣が悲しむが、お前が死んでも誰も悲しまないことだ」と言ったことで分かるように、人望がありませんでした。一方清正は、武功では福島正則や黒田長政に劣り、細川忠興のように才人でもなく、突出したものはなかったのですが、人柄が良く、我慢強い性格だったことから、これらの個性的な武将のつなぎ役になっていたと思われます。七将襲撃事件でも、清正は参加者から担ぎ上げられてリーダーを務めたと思われます。清正は、家康や秀吉、信長のような、リーダーになる意志と素質を持った絶対的リーダーではありません。家康は、関ヶ原の論功行賞で、豊臣恩顧の大名を西国に移動させましたが、その結果、西国は豊臣恩顧の大名（秀吉に取り立てられた大名）ばかりとなり、まるで日本が東西に分割されたようになりました。もし西国大名を糾合する者が現われたら、東西対立の時代になります。西国の大名に、絶対的なリーダーは見当たらない中で、みんなに担がれてリーダーになる可能性がある大名として、清正を見ていたのではないのでしょうか。

それを防ぐために、家康は、1603年清正が江戸に参上したとき、清正と清正に嫁いだ家康の養女（かな姫）との間に生まれていた娘八十姫（3歳）と家康の十男頼宣（2歳）との婚約を約束します。正式の婚約は、1609年となっていますから、許嫁としたというところでしょうか。さらに1606年には、清正の長女あま姫と徳川四天王の1人榊原康政の嫡男康勝との婚姻が行われます。清正にとって榊原康政は、徳川軍で先攻を務めることが多く、武略に長けた憧れの武将だったようで、朝鮮出兵の折には、金桔梗笠馬印を借り受けています。これで徳川方との2つ目の鎧ができ、清正と徳川方との結びつきは強固なものとなります。そして、清正を徳川姻戚大名の代表とし、現在まで続く清正崇拜の原因を作ったのが清正の次女八十姫の家康の十男頼宣への嫁入りです。頼宣は、徳川御三家の1つ紀州徳川家の初代藩主となり、孫の吉宗が第8代将軍に就任して以後、第14代将軍家茂まで吉宗（頼宣）血筋の将軍が就任します。この中で清正は、吉宗の外曾祖父として見直しが進み、儒教教育により武士に大切なものとして主君への忠義が強調されたことから、将軍家外戚である清正が忠義の武将の代表に祭り上げられました。実際は、清正は秀吉死後、一早く家康に乗り換えて、代表的な徳川姻戚大名になっていますから、この人選は間違いです。徳川四天王から選べばよいのですが、そうすれば譜代大名間の序列が崩れるのでしょうか。立花宗茂も考えられますが、関ヶ原の戦いで西軍に就いた前科があります。そういうわけで、将軍家姻戚であり、加藤家はもう存在せず大名間の序列に影響を与えないことから、清正が忠義の武士の代表に祭り上げられたと考えられます。

このように、清正は、当初秀吉に取り立てられたと言う意味で豊臣恩顧の大名でしたが、秀吉死去後は一早く家康に近づき、やがて徳川家の代表的な姻戚大名となっており、一般の人々が持つ「徳川幕府時代においても徳川家よりも豊臣家に対して忠義の心を持っていた」という意味での豊臣恩顧の大名というのは間違いです。

2. 清正の実像

では、実際の清正は、どういう人だったのでしょうか？
歴史上の事実から想像すると、次のような人物となります。

- (1) 小柄で賢そうな顔つきの律義者
- (2) 実務派
- (3) 我慢強く、先輩・同僚・後輩からリーダーに押し上げられるタイプ
- (4) 城や河川工事などの開発プロジェクトのほか、商社的取引もできる経営者大名
- (5) 娘には良きパパだった

以下に説明を加えます。

- (1) 小柄で賢そうな顔つきの律義者

(抛り所となる事実)

・多くは上記記述と重なります。上記記述を参照。

・秀吉に取立てられた恩は忘れず、徳川幕府になっても、江戸参勤の折には、行き帰りに大坂城の秀頼のもとに伺候していたようです。また、実子のように育ててもらった北政所への伺候も欠かさなかったと言います。

・立花宗茂には、第1次蔚山城の戦い、第2次蔚山城の戦いで助けて貰い、非常に恩義を感じていました。そのため、関ヶ原の戦い後の柳河城攻めでは、攻撃陣の鍋島・黒田を説き伏せ、家康から助命を得ることを請け負い、宗茂に開城させています。

・朝鮮での松雲大師惟政との交渉では、秀吉が示した和議7条件を示し、これを飲まなければ和議はない、徹底的に戦う、と真っすぐな交渉をしています。小西行長が明側の要求を丸呑みしているのとは対照的です。

・関ヶ原の戦いの前、黒田如水・長政親子が西軍に就くと思われた小早川秀秋や吉川広高に書状を送り、領土の安堵などの条件を示し、東軍に就くよう調略したのに対し、清正は、立花宗茂らに書状は送ったようですが、次の天下人は家康だからという説得のみで、利益を餌にする調略的なことはしていません。

・家康の謀臣として恐れられた本多正信は、清正に3ヶ条の問い質しを行うなど、清正と仲が良かったと言います。清正は裏表がなく、従って正信の仕掛けにも動ぜず、正信としても裏読みする必要がなく、付き合いやすかったものと思われま。

・清正は、秀吉の側に仕える実務責任者からいきなり大名になっており、抛って立つものは実務経験でした。和歌や俳句、茶道を学ぶ時間はなかったと思われ、清正には和歌や俳句など気の利いた言葉は残っていません。

・清正のやり方は、経験やデータに基づき突き詰めていくスタイルですが、どうしても人知の及ばないものに突き当たりますので、その部分は法華経に委ねたのでしょう。

・生き方そのものが儒教的であったので、朝鮮から帰国後学び始めた儒教には、共感するものがあつたと思われまふ。

(2) 実務派

(抛り所となる事実)

・1593年西生浦倭城から肥後の家臣に出した物資調達の指示は51ヶ条におよぶ細かいものです。

・清正が後見していたあま姫の夫榊原康勝に出した書状でも、康勝がとるべき行動を細かく指示しています。

・朝鮮での西生浦倭城の築城や蔚山倭城の縄張り、熊本城の築城なども実務に通じていたからこそできたものです。

・熊本での河川改修や干拓などの土木工事、朱印船貿易も実務の経験が裏付けとなつていまふ。

・自分の頭の中に完成図を持ち、実施計画も自ら作成し、進捗管理まで行つていまふ。清正は、秀吉に仕えていた頃実行部隊の小隊長くらいの立場であり、今の会社で言えば、一番実務を知つている係長や課長だつたと思われまふ。それがいきなり肥後半国の大名になりましたから、やり方は、係長や課長のやり方であり、当然実務的になつたと思われまふ。

・潰れそふな肥後藩の改革を行い、肥後の鳳凰と呼ばれた細川藩第6代藩主細川重賢や寛政の改革を主導した幕府老中松平定信は、清正を尊敬していまふが、それは清正が自らのアイデアで、歳出削減や質素儉約ではなく、収入拡大策で藩の財政を立て直したからだと思われまふ。実務経験のない重賢や定信は、清正のアイデアの源泉である豊富な実務経験が羨ましかつたものと思われまふ。

(3) 我慢強く、先輩・同僚・後輩からリーダーに押し上げられるタイプ

(抛り所となる事実)

・文禄の役で、咸鏡道に入つて現地の朝鮮人が2人の朝鮮王子が奥地に逃げたと告げたところ、共に行動してゐた鍋島直茂は、畏を心配して行かない方が良いと主張したのに対し、清正は、自分が行くので、鍋島はここに留まるよう言つて、自軍のみで進軍し、朝鮮王子を捕らえまふ。鍋島は、清正より24歳年長であり、顔を潰さないよううまく折り合ひを付けていまふ。

・咸鏡道で朝鮮義兵の攻撃が激化し、清正家臣が守る端川、城津、吉州の番城が義兵に包圍されまふ。季節は冬で、清正軍の兵士は、低温と雪焼けで多くが痛み、使えない者が多数でした。そのとき、漢城の朝鮮奉行から咸鏡道を速やかに撤退し、漢城に戻るよう指示が来まふ。鍋島は、3つの番城は見捨てることを主張しまふが、清正は部隊を率いて救援に向かい、3つの番城の番兵を救助しまふ。

・第2次晋州城の戦い後、武功評価の席で6歳若い黒田長政が「城内一番乗りは自分だ」主

張した際、清正は「貴殿の言われる通り」とあっさり認めたと言います。事前の取り決めでは、黒田・加藤軍は同時に攻め入ることになっており、大将も2人同時とすべきで、普通なら抜け駆けと非難してもおかしくなかったと思えます。清正は、年下の者と張り合わず、後輩に成果を譲っているように思えます。

・第1次蔚山城の戦いの際、西生浦城で蔚山城が約5万7千人の明・朝鮮軍に包囲されたことを聞いた清正は、直ぐに20、30人の部下を連れただけで、船で蔚山城に入っています。それは、籠るのが浅野幸長らだけでは、日本軍は救援に行かないという結論になり兼ねず、自分が居れば救援に行かざるを得なくなると考えたからと言います。14歳下の浅野幸長にとっては、頼もしい兄貴分であり、その後浅野幸長はずっと清正と行動を共にしています。

・第1次蔚山城籠城戦の後、日本の救援軍は、蔚山城以下3城の放棄を主張し、清正軍ら右軍の大将である毛利秀元は当初反対しましたが、救援された立場上折れて放棄に同意します。この考えを主張する武将は、秀吉に上げる書状に連署しましたが、清正や浅野は署名していませんので、築城し命を賭けて城を守った者としては、放棄に反対だったと思われる。小西行長が、対象となった順天城の放棄にはっきりと反対しているのと比べると、清正の上司（毛利秀元）や救援軍に配慮する性格が出ているように思われます。

・第2次蔚山城の戦いでは、救援に駆けつけた5歳若い立花宗茂を饗応し、日本一の武将と持ち上げています。そしてその恩を忘れず、関ヶ原の戦い後の柳河城攻めでは、身命を賭して家康から助命を得ることを約し、宗茂に開城させ、その後は肥後に引き取り賓客としてもてなしています。

・関ヶ原の戦い後の宇土城攻めで、清正は、救援を必要としなかったにも関わらず、東軍に貢献した証拠が必要だった肥前日野江藩主有馬晴信、大村藩大村喜前、平戸藩松浦鎮信の参加を受け入れ、領土安堵の手助けをしています。この3人は、朝鮮の役では一貫して小西と行動を共にしていたキリシタン系の大名であるにも関わらずです。このこともあってか、7歳若い大村藩主大村喜前は、清正と同じ時期（1602年）に領内で盛んだったキリスト教を禁止し、自らは清正と同じ日蓮宗に改宗しています。

・清正は、宇土城落城後小西配下の武士を多数召し抱えましたが、小西重臣の内藤如安まで食客としています。内藤如安は、キリスト教徒で、文禄の役の際、小西が主導した明との和議交渉で、嘘の秀吉の降状を持って、北京に交渉に就いた者です。小西憎んで部下は憎まず、ということでしょうか。

(4) 城や河川工事などの開発プロジェクトのほか、商社的取引もできる優れた経営者大名実績)

- ・熊本城築城
- ・コメの生産増大

新田開発 1万6千ha(21万石相当)、現在の水田の2割に相当。横島、千丁など。

堰の設置 馬場楠堰・下井出堰・渡鹿堰(白川)、鶴の瀬堰・呑吐堰(緑川)、遙拝堰(球磨

川) など。

灌漑用水 馬場楠井出の鼻ぐり (13 km)、渡鹿堰用水など。

塘の設置 白川・坪井川を分ける石塘、江津塘、緑川・桑鶴の轡塘など。

- ・朱印船の派遣 (江戸時代に3回。大名では最多)

- ・豊前・豊後・薩摩・日向街道の整備

(背景)

- ・清正は、近江長浜に長く住んでおり、琵琶湖沿岸では、琵琶湖や河川の改修による米の増産が盛んに行われていました。従って、近江に居たことがある大名 (例えば筑後柳川藩主田中吉政) は、掘割や用水の引き込み、干拓などによる米の増産が得意だったようです。清正もこの影響を受けていると思われます。

- ・清正は備中高松城攻め (1582年) に参加しており、水攻め用の堤防造りにも関わっていたと思われます。そこから、河川改修・築堤の技術を学んだのではないのでしょうか。

- ・清正は、前肥後国主佐々成正の家臣を多く引き継いでいますが、佐々成正は元越中富山藩主であり、堤防 (佐々堤) などを築き富山の暴れ川を治めた実績がありました。この経験を有する家臣 (例えば大木土佐) が肥後の河川の改修の力になったと思われます。

- ・その後の中国大返し (約200 kmを10日で移動) も経験していますが、これは移動の大プロジェクトであり、プロジェクト進行のノウハウが得られたはずです。

- ・名護屋城普請 (1591) にも普請奉行の1人として参加していますので、ここから清正の城作りの一歩が始まったと思われます。

- ・西生浦城は、清正が一貫して築城した城です (1597年)

- ・蔚山城は、清正が縄張りを行い、工事は浅野幸長らに任せたようです。第一次蔚山城の戦い後の修復、防備の見直し (1598年) には、中心的役割を担ったと思われます。

- ・清正は、少なくとも播磨・和泉・讃岐で秀吉の直轄地の代官を務めています。会社で言えば支店長であり、経営のノウハウを学んだと思われます。海外貿易については、和泉の代官時代に、堺の商人を見て目を付けていたのでしょうか。

- ・清正は、肥後の初代国持大名に任命された佐々成正が肥後国人一揆に会った際に、秀吉の上使の1人として肥後に赴任し、肥後の実態を調査していました。従って、肥後の現状は把握済みで処方箋もある程度持っていたと思われます。従って、朝鮮から帰国後は、一気に改善策を実施したものと思われます。

(5) 娘には良きパパだった

- ・1606年あま姫が館林藩主榊原康政の嫡男榊原康勝に嫁いたときは、100人を超える女中などの世話人を同行させたと言います。但し、これは10万石の館林藩にとっては財政的に負担になったようです。こういうところまで気が回らないのも清正の特徴のように思われます。

- ・1609年に次女八十姫と家康十男頼宣の婚約が決まったときには、「八十姫の嫁入りには、肥後藩の3年分の経費を使っても惜しくない」と言ったとあります。そして、翌年の結

納使の来城に合わせて熊本城本丸御殿内に豪華絢爛の「昭君之間」を作っています。娘を嫁がせるに当たっては、金に糸目をつけない態度を示しています。

・1716年の八十姫の孫第8代将軍徳川吉宗とあま姫血筋の幕府老中阿部正喬の出会いがなければ清正の復活はなく、今の英雄清正も存在しませんでした。清正が今の地位に上ったのは、2人の娘たちから清正パパへのプレゼントとも言えます。